

Life Design Focus

ペットとの終の棲家

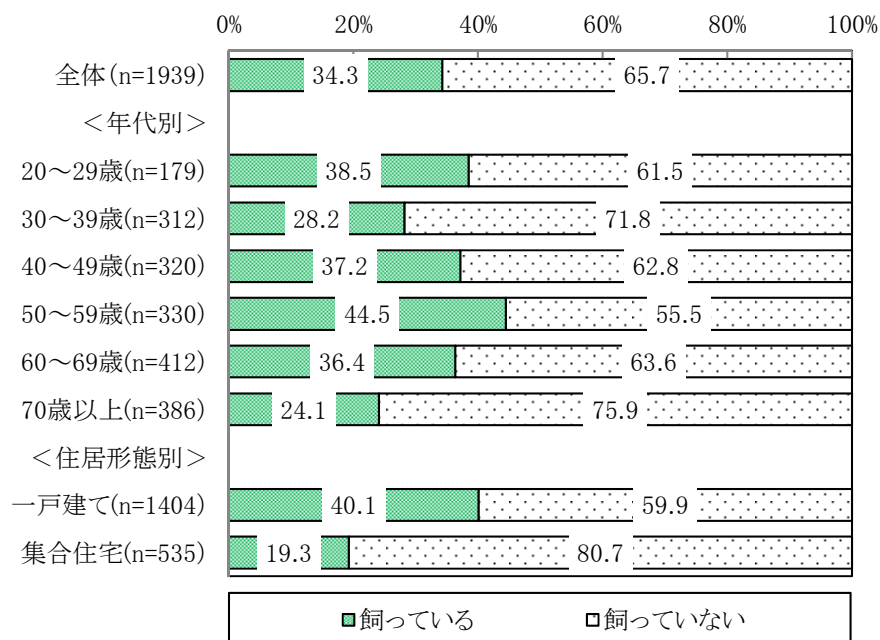
第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部 研究開発室 北村 安樹子

<70歳以上の4人に1人がペットを飼っている>

内閣府が2010年に行った『動物愛護に関する世論調査』によると、ペットを飼っている人の割合は34.3%と、国民のおよそ3人に1人を占める（図表1）。いまやペットは飼っていない人にとっても、多様な場所で目にする身近な存在である。

ペットを飼っている人の割合を年代別にみると、50～59歳（44.5%）がもっとも高く、半数近くを占めている。また、少し驚くのは、70歳以上の高齢者のおよそ4人に1人（24.1%）がペットを飼っているという点である。現時点で中高年以上の世代にペットを飼う人がこれほどいることをふまえると、今後は飼い主自身の高齢化によってペットの飼育が難しくなる事態が増えると想定される。

図表1 ペット飼育の有無（性別・年齢別・住居形態別）



資料：内閣府（2010）『動物愛護に関する世論調査』

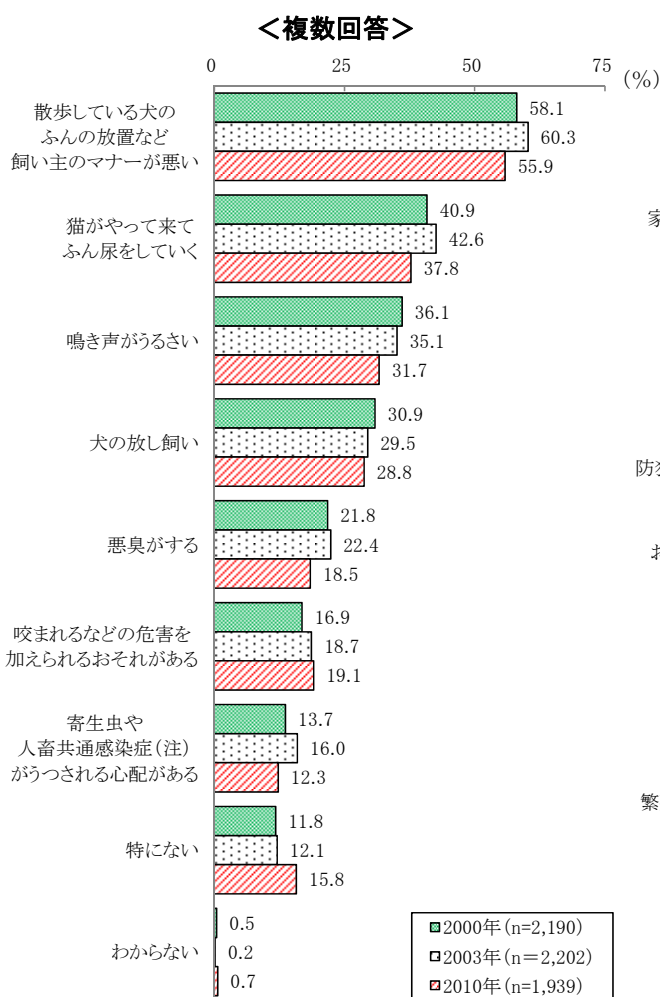
＜ペット飼育のよい点・悪い点＞

ところで、ペットの飼育については、飼い主のマナーをめぐるトラブルをはじめ、ネガティブな印象をもつ人もいるかもしれない。

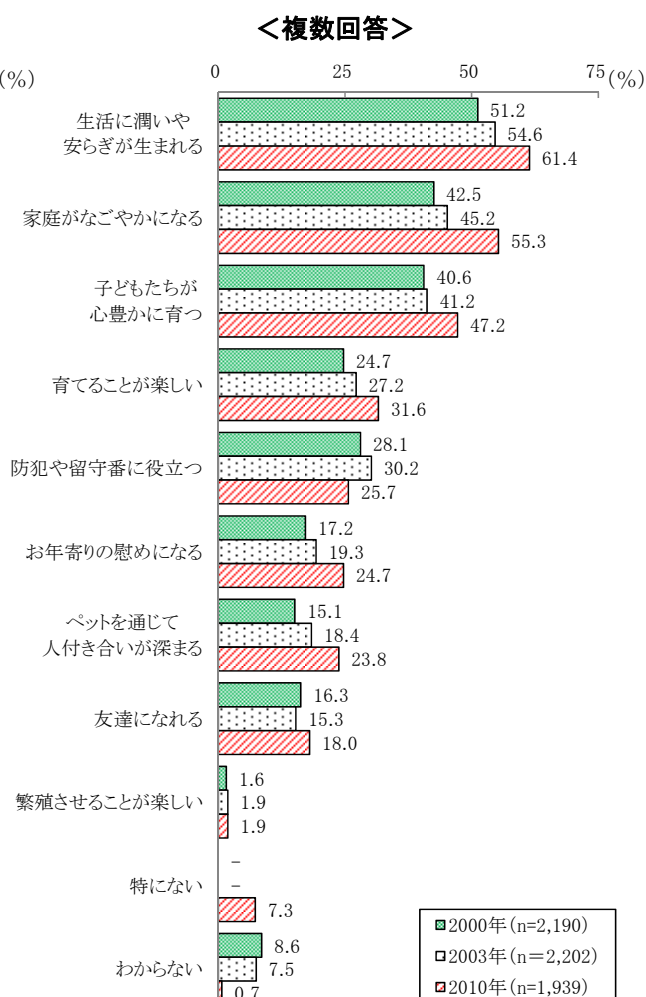
しかし、先の世論調査において、ペットを飼うことの悪い点についてたずねた結果をみると、「特にない」と答えた人の割合は15.8%（2010年）で、2000年の11.8%から増加している（図表2）。「散歩している犬のふんの放置など飼い主のマナーが悪い」（55.9%）、「猫がやって来てふん尿をしていく」（37.8%）が上位2項目としてあげられてはいるが、これらの点を含めて多くの項目は減少傾向にある。ペットを飼うことに対する人々の印象は、飼い主のマナー向上などによって、おおむねよい方向に変化してきていると考えられる。

実際に、ペットを飼うことのよい点をたずねた結果をみると、「特にない」と答えた人はわずか7.3%に過ぎず、ほとんどの人がペットを飼うことにはよい点があると考え

図表2 ペットを飼育することの悪い点



図表3 ペットを飼育することのよい点



資料：内閣府『動物愛護に関する世論調査』各年版
注：ペットから人にうつる病気

ていることがわかる（図表3）。時系列でも、「生活に潤いや安らぎが生まれる」（2000年 51.2%→2010年 61.4%）、「家庭がなごやかになる」（同42.5%→55.3%）、「子どもたちが心豊かに育つ」（同40.6%→47.2%）などペットを飼うことによる多様な効果に共感する人が増加しているようすがうかがえる。

＜高齢者を精神的に支えるペット＞

また、図表4は、ペットを飼育することのよい点としてあげられた項目を年齢別に比較したものである。これをみると、「生活に潤いや安らぎが生まれる」と「家庭がなごやかになる」の2項目がどの年代にも共通して上位にあげられた一方、20代では「育てることが楽しい」（42.5%）、30代～60代では「子どもたちが心豊かに育つ」（43.3%～63.4%）、70歳以上では、「お年寄りの慰めになる」（32.6%）がそれぞれ上位項目に含まれていることがわかる。

このように若い世代では、育てることの楽しみや子どもの教育上の効果をあげる人が多くみられるのに対し、高齢者では高齢期を過ごす上で、ペットの存在が精神的な支えになることに共感する人が多くなっている。

図表4 ペットを飼育することのよい点(年代別)＜複数回答上位3項目＞

	第1位	第2位	第3位
20～29 歳(n=179)	生活に潤いや安らぎが生まれる(70.9%)	家庭がなごやかになる(68.2%)	育てることが楽しい(42.5%)
30～39 歳(n=312)	子どもたちが心豊かに育つ(61.5%)	生活に潤いや安らぎが生まれる(61.5%)	家庭がなごやかになる(59.6%)
40～49 歳(n=320)	生活に潤いや安らぎが生まれる(68.8%)	家庭がなごやかになる(63.4%)	子どもたちが心豊かに育つ(60.9%)
50～59 歳(n=330)	生活に潤いや安らぎが生まれる(68.2%)	家庭がなごやかになる(61.5%)	子どもたちが心豊かに育つ(53.3%)
60～69 歳(n=412)	生活に潤いや安らぎが生まれる(62.9%)	家庭がなごやかになる(52.2%)	子どもたちが心豊かに育つ(43.0%)
70 歳以上(n=386)	生活に潤いや安らぎが生まれる(43.3%)	家庭がなごやかになる(37.3%)	お年寄りの慰めになる(32.6%)

資料：内閣府『動物愛護に関する世論調査』2010年

＜ペットと暮らす高齢夫婦の約8割が、自宅で一番大事なものはペット＞

当研究所では昨年、60歳以上の夫婦2人暮らし世帯の男女800名を対象に、高齢期における自身の自宅への愛着や終の棲家に関する意識をたずねるアンケート調査を行った。その結果、60歳以上の夫婦2人暮らし世帯でペットを飼っている人は持家居住者の15.5%を占め、その約8割が、自宅にあるもののなかでもっとも大切なものとして「ペット」の存在をあげた（図表省略）。

その理由についての自由記述をみると、子どもや孫のような存在として（ケース e～i）、ときには夫婦のかすがいとして（ケース k）、あるいは話相手や散歩の同行者として（ケース h～j）、ペットが回答者の心身を支える上で大きな役割を担っている様子がよく伝わってくる（図表 5）。なかには飼っている犬のために長期の旅行を控えないなければならないことや、朝早くから起きてペットの世話をしなくてはならないこと、生き物であるがために放っておけないことなどといった生活上の制約が、かえって高齢者の生活リズムや心身の健康を保つのに役立っていると感じられる例（ケース f、r、s）なども見受けられる。

**図表5 ペットを飼う60歳以上の夫婦2人暮らし世帯が
自宅で最も大切にしているものとして「ペット」をあげた主な理由(自由記述)**

- a：我が家に来てから16年になり皆を癒してくれているから(60代女性、一戸建て)
- b：子犬の頃から一緒に生活している家族だから(70代男性、一戸建て)
- c：25年くらい飼っているから(70代男性、集合住宅)
- d：生まれた時から可愛がっているから(70代男性、一戸建て)
- e：子どもと思っているから(60代女性、一戸建て)
- f：子ども同然で、今、犬のいない生活は考えられません。旅行も犬のために3日までと決めています(60代女性、一戸建て)
- g：孫のようです(60代女性、一戸建て)
- h：子ども同然で朝夕の散歩でリフレッシュしている。一緒にいる時間も長い(60代女性、集合住宅)
- i：子どもが独立して会話が少なくなるときに会話の種をつくってなごませてくれる(60代女性、集合住宅)
- j：話の相手になってくれる(60代男性、一戸建て)
- k：小さい命だけど、夫婦の間の空気をよく読み、かすがいになっていると思う(70代女性、集合住宅)
- l：私の意志に従う賢い犬だから(70代男性、一戸建て)
- m：長年一緒にいるがすごく我々思いで、なんでも先取りして心配してくれる(70代男性、集合住宅)
- n：心の安らぎになるから(60代女性、一戸建て)
- o：無条件に愛らしい(60代女性、一戸建て)
- p：老犬だが、少しでも長生きさせたい(70代男性、一戸建て)
- q：特に将来への希望などない私に「生きなきゃ、ペットのために健康でいなければ」と思わせてくれ、それが自身の健康維持になっている。また、ペットを通じての友人が多くいます(60代女性、一戸建て)
- r：彼女たちがいるので、毎日朝からたたき起こされてエサやトイレの世話、主人の朝食、掃除とぐうたらな私を働かせます。会話もできます。彼女たちはとつても気ままにわがままで、手がかかるので老化防止になっています(60代女性、一戸建て)
- s：生き物であるので、放っておけないため。また、散歩など健康に役立つ(70代男性、一戸建て)
- t：妻の心の健康によい(60代男性、一戸建て)

資料：第一生命経済研究所『お住まいについての意識調査』2013年3月

注：調査対象者は、全国に居住する60歳以上の夫婦2人暮らし世帯男女800名。調査時期は2010年11月。

＜飼えなくなったペットの行方＞

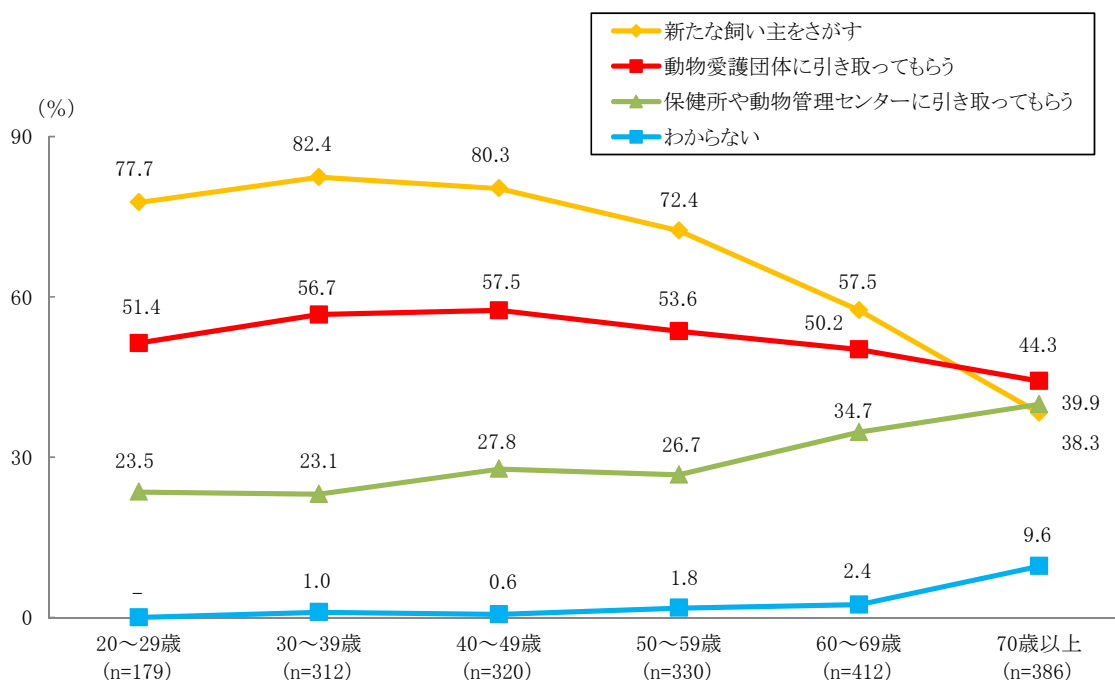
少子化によって子ども関連市場の縮小が懸念される一方、ペット関連市場は、これに代わる新たな分野として社会経済的にも注目されてきた。先にもみたように、60歳以上の夫婦2人暮らし世帯で飼われているペットには、とりわけ精神的な面で彼らの

健康を支えているケースが少なくない。ペットはいまや社会経済的にも、また高齢者の精神的健康の支え手としても、われわれの社会において重要な役割を担っていると見える。

ただし、飼い主の高齢化は、飼い主が年老いて世話が難しくなったペットの行く末をどうするかという問題にもつながっている。先の世論調査では飼えなくなったペットの処置についてもたずねている。これによると、「保健所や動物管理センターに引き取ってもらう」と答えた人は60～69歳で34.7%、70歳以上では39.9%と、それ以外の年齢層に較べて高く、70歳以上では約1割が「わからない」と答えている（図表6）。

こうしたなか、先月1日には改正動物愛護法が施行され、ペットの販売をめぐる規制が強化される一方、都道府県等が動物取扱事業者からの引取りや繰り返しの引取り、老齢や病気を理由とした引取り等を拒否できるようになった。この背景には、飼い主のマナー向上などによってペットとの共生に社会的な理解が広がる一方で、ペットの安易な販売・所有や、無責任な飼育放棄の結果、保健所等に引取りを依頼する例が依然少なくないこともある。

図表6 飼えなくなったペットの処置をどうするのがよいと思うか(年齢別) <複数回答>



資料：内閣府『動物愛護に関する世論調査』2012年

注1：各年代の選択割合が5%に満たない「自然の中などに放しに行く」「その他」は掲載を省略。

注2：調査時には次の資料が提示されている。「ここでいう動物愛護団体とは、飼い主のいない犬や猫を引き取って飼育しながら、新たな飼い主を探して譲り渡す活動を行っている民間のボランティア団体を指します。また、動物管理センターとは、ペットの適切な飼育についての展示や講習会の開催、飼い主のいない犬や猫の引き取りと新たな飼い主への譲り渡しや殺処分などを行っている地方自治体の施設を指します」。

<ペットとの終の棲家>

このようななか、現在、高齢世代では、自宅での永住を含めて自身が老後をどのように過ごすかという終の棲家をめぐる生活設計が大きな関心事になっている。今後は高齢期をペットとともに過ごしたいと考える人であれば、ライフデザインにおいて、自身の老後に加えて、自分が年老いて十分な世話をしやれなくなった後のペットの行く末を託せる仕組みが強く求められる時代を迎えることになるだろう。すでに一部の飼い主からは、年老いた飼い犬のための「老犬ホーム」や、自身の死後のペットの行く末を託すための「ペット信託」といった仕組みが注目され始めている。

また、住まいに関していえば、以前はペットの飼育を禁じていた集合住宅でも、最近では分譲・賃貸にかかわらず、ペットを飼えるところが増えている。時代の変化にともなって、ペットとともに安心して暮らせることやペットと楽しく暮らせることが、住まいの付加価値になってきたことの現われだろう。

今後は単にペットを飼えるというだけでなく、ペットや飼い主が年老いても末永く安心して暮らせること、飼い主が年老いて世話が難しくなった後も愛着のあるペットの行く末を託せるようなサポートを得られることなどが、ペットとの暮らしを大切にしたいと考える人々にとって、住まいの大きな付加価値になっていくに違いない。

(きたむら あきこ 主任研究員)